

日本海区水産試験研究 連絡二三ノ又

日本海区水産試験研究分

第 60 号

新潟市万代島
日本海区水産研究所

印 刷

昭和31年1月1日発行

出雲地方から朝鮮半島南部への航海は、潮流、風向などを利用すること容易で、太古から行われてきた。そして、この航路で機密的な役割を果してゐる。だが、現在の竹島や鬱陵島である。昔は一般に海蝕島といわれる。いや地図や写本などの古文書類は、古いもののが比較的多く残っている。たまたがつて、我が國や外國へ主として欧洲へ印刷された古文献も少くない。

わが国で公刊された古圖のうち、問題になつてゐる竹島が日本領であることを「史的に証明する資料」として最も古いものは、長久保赤水へ玄珠の改正日本輿地路程全四冊である。本四の旧版と思われる巻行年・書作名のない印日本輿地路程全四冊や、安永二年、刊一七七五年三月日昇邦彦へ刊行年が記入してない赤水の印改正日本輿地路程全四冊もあるが、刊行年が明記したものは、安永八年(一七九九年)である。この版が一番古い。改正日本輿地路程全四冊は、わが国で印刷した地図として緯度・経度を示した最初のものである。そして、当時は評判となり、

竹島の古刊図
川

川合彌泰

日本海

59

三七年）版や刊行年のないものなど数版があり、全く利用せられた。このように、江戸時代の諸図では、現在の竹島は日本領として普遍的であった。この文で、「私がいろいろ『現在の竹島』と書いたことには重大な意味がある」というのは、現在の竹島を昔は松島と呼ぶ、現在の護陵島を昔は竹島と云つたからである。つまり前に述べた諸図に現れる竹島とあるのが現在の竹島であり、竹島（磯サ島ともいう）とあるのは現在の護陵島である。この原因は、一八四〇年に刊行されたブレイリップ・フオン・シーボルトの『日本人の原圖及び天文学的觀察による日本圖』で、松島と竹島との地名を誤ったことにある。その後、これを種本として歐米で発行された海図や地図は、殆んどこの誤りを重ねて現れてゐる。そして、それが、国までがこの誤りを承認してしまつた。それは、明治時代の政策思想に入ってしまった。されば、外國の文獻を無批判的に正しいと信じ、それが國古來の文獻を翻訳しなかつたからであろう。このために、現在の竹島（昔の松島）の領土権を厂史的に主張する場合に、両者をことさらに混同せられたと思われる韓國側の言説がないともかい。

なる項目一第六十号一

- 竹島の古刑圖 川合参考
- 対島暖流扇風機皆あれこれ 下村敏正
- 昭和三十一年を過てて 野口栄三郎
- 新元のいじめ 内橋潔
- まづ日本人から 山中義一
- 昭和三十七年の希望展望 加藤源治

対馬暖流開発
調査あれこれ

下村敏正

一 海事史研究家

暖流調査といよいよ、我が三年を終つうとしていましたが、昨三十年の暖流調査は眞に既道に乗ったといふべきで、一杯です。それを一言でいえば、過去二ヶ年の概観的本調査から、段々と具体的な問題について精しい調査が行われるようになつきました。まず大物イワシ漁況予報が、当季春にとつてい

昭和三十一年を迎えて

野口栄三郎

夏には新造船着丸によつて日本海の五〇漁沖合までに至る精密な調査を実施しました。こんな精しい調査をやつたのは、戦前戦後を通じて初めてのことです。調査項目も、日本研、東大、北大とそれべく専門分野の人が乗船し、卵稚魚、浮遊水、微藻、浮游物など多岐にわたります。また、船上の大半資料整理中ですが、その一部は、来る三月のシンボジウムで発表をします。

次に海流瓶の放流、魚類の標識放流も今まで全く盛んに行われ、魚礁も「調査」という範囲を悉く越えて、三十年からは、実際に当業者の手で標識されるようになったことも大きな躍進でした。魚礁に附連して、苔巣丸で能登沖・大和堆東方に新しい礁が発見されたこと、佐渡遠洋(足置漁場)に現れたこと、能登沖の新礁は本年もかなり大きく、能登の四〇浬位の距離なので、本年は漁業試験を本格的にやつづみたいと感っています。昨年石川水試の手で予備的に試験をやつております。以上思ひ出しますまき、前後なく記します。本年も、よりシノボジウムも目前に迫っています。本年も、協力力を得たく存じます。

(日本水研、開発部長)

利用本年の研究のみならず、このように化学的手段を活用して、追求しなければならない研究の問題は今後益々増加して行く傾向にあるのであるが、行政審理の懶惰せは、このよくな化學部門を担当する、しかも研究陣容の最も貧弱な利用関係には極めて大きな影響を与えていた。研究者が少くなければ研究課題を整理して行けばよいのであるが、大さな懶惰が存在する。そしてこのことは常にもつべきである。この懶惰が発生する所に、私は馬鹿流調査の一環として日本海沿岸府県と協力して、漁業試験を行つて来たわけであるが、日本海北部海区の打合せ会議においても、それが、日本海の方向を出そう。共通問題をつくんで年慶は一つの方向を打ち出したのであつた。ゼイ一ツは次期漁業権の切替期が引年度に迫つて、岡ほ上、新潟県、福井県については、自然的条件についても、又社会経済的条件についても、その漁場計画樹立の際にもつと水産試験場の意見をも反映せしめられるようにして行きたいことをも反対せしめられた。この会議に先立ち、2月調査室では男鹿半島の内湾に実地調査を行つた。この村の特徴は北海道出張で豊富なが、これが近年、漁業制度改訂以来定置漁業を地元漁業協同組合の運営に移し、幸いなことに、天の時、地の利、人の和、資本調達等の好条件に恵まれ、又条件を作り出し、建屋好成績を挙げ、これが、中興となつて漁村経済が段々に発展をしていく寒風を親しく調査し得たのであるが、近年以前の諸条件

新年の言葉

山中義一

のかも知れない。今年はその様に希望や抱負を述べることは止め、自己反省の一年と致したいと思つてゐる。何とぞ宜しく御指導と御機動を頼みたい。

(日本水研、利用部長)

ク逆くものはそれ、水の如きが、昼夜をおかず、新年を迎えるに当つて、先づ遅し方の回顧をしあしお許し願いたい。一昨年慶より私は馬鹿流調査の一環として日本海沿岸府県と協力して、漁業試験を行つて来たわけであるが、年慶は一つの方向を出そう。共通問題をつくんでこうといふ意を打出したのであつた。ゼイ一ツは次期漁業権の切替期が引年度に迫つて、岡ほ上、新潟県、福井県については、自然的条件についても、又社会経済的条件についても、その漁場計画樹立の際にもつと水産試験場の意見をも反映せしめられるようにして行きたいことをも反対せしめられた。この会議に先立ち、2月調査室では男鹿半島の内湾に実地調査を行つた。この村の特徴は北海道出張で豊富なが、これが近年、漁業制度改訂以来定置漁業を地元漁業協同組合の運営に移し、幸いなことに、天の時、地の利、人の和、資本調達等の好条件に恵まれ、又条件を作り出し、建屋好成績を挙げ、これが、中興となつて漁村経済が段々に発展をしていく寒風を親しく調査し得たのであるが、近年以前の諸条件

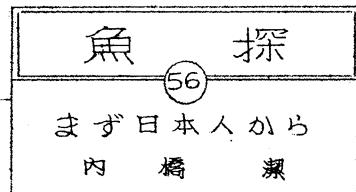
件を詳に解明し得なかつたのは残念であったとはいえ、一つの収穫と考へられよう。漁村実態調査も廃止の目標が漁村振興・漁民の生活向上・漁業社会

南朝鮮の韓国人と日本とは、国民感情として、どうもしつくりいつていよいよ思える。何れの側にも言い分があるであらう。しかし私は日本人として、日本にずっと住み又時には朝鮮を旅したこともあつて、韓国の常民たちが日本人に長い間どんな仕打ちを受けて過して来たかを目の見て見えて、驚いて、馬と知つてゐるから、どうも韓国がいきになり勝ちである。

漁後の二三街や汽車の中など、時には目に余る韓国人を見た事もあるが、何時もおおらかに見廻して、同情的な立場に立つて来た。こんな立場に立つこと自体は、私が天の邪鬼であるからだとは、毛骨思つていいのみならず、私共日本人がかつて甚だしく理解がなかつたせの反動であると感じさせしたことであつた。昭和十五年と云ふは、日本が朝鮮統治に一段と若を入れ朝鮮の海山のあいだを旅したことがあつた。それ等の日に町や村で至騒した複雑な感情は、今でも残るが、これが出来ないでいる。それから数年のうちに「史の必然性」と云うのかは時世の長い間の島国文化のせいでもあるが、今は日本人同類の間に、あれはなくないが、日本人同類だと云ふべきが、當時には何處か排他的な心地を感ぜたのである。

さて、仲間入りをこねて、日本人から自分云々の庇いが、大好きな姉を髪に時々にいたみだすのに似てゐる。あるいは、どうして云ひたいけれど、日本人の心地を感ぜたのである。今までのところは、日本人の心地を感ぜたのである。

そうした世代が早く出現するためにも、また一人早く問題を解決する意も、私共日本人からまず日韓両國によつて來たつた韓の「史的」的な過程を経て、漁港の開拓とともに注目人で、一層進めて人々との連繋は比後のものであります。



向うもしつくりいつていよいよ思える。何れの側にも言い分があるであらう。しかし私は日本人として、日本にずっと住み又時には朝鮮を旅したこともあつて、韓国の常民たちが日本人に長い間どんな仕打ちを受けて過して来たかを目の見て見えて、驚いて、馬と知つてゐるから、どうも韓国がいきなり勝ちである。

漁後の二三街や汽車の中など、時には目に余る韓国人を見た事もあるが、何時もおおらかに見廻して、同情的な立場に立つて来た。こんな立場に立つこと自体は、私が天の邪鬼であるからだとは、毛骨思つていいのみならず、私共日本人がかつて甚だしく理解がなかつたせの反動であると感じさせしたことであつた。昭和十五年と云ふは、日本が朝鮮統治に一段と若を入れ朝鮮の海山のあいだを旅したことがあつた。それ等の日に町や村で至騒した複雑な感情は、今でも残るが、これが出来ないでいる。それから数年のうちに「史の必然性」と云うのかは時世の長い間の島国文化のせいでもあるが、今は日本人同類の間に、あれはなくないが、日本人の心地を感ぜたのである。

件を詳に解明し得なかつたのは残念であったとはいへ、一つの収穫と考へられよう。漁村実態調査も廃止の目標が漁村振興・漁民の生活向上・漁業社会

向上にある以上行政・政治等との関連は、当然重視すべきであり、この意味からも前述の意義は認められる。同様、新潟県においては、新潟水試

がりの瘦な気配が強く残つてゐる。こんな始末だから、韓国人とは体质的にも文化的にも血肉をわけあつた兄弟姉妹として、理解し親和すべきだと云つた處で、なかなか大袈裟うけがしない。大衆うけがしないと云うことが、何だか悪い革の様に「概に思ひ勝ちの今の世であるだけに、この事をことさらに主張してみる氣にもなるのである。

韓国の出店であり、出発所であったこの日本が

いっつての間にか、「一本立ち」が出来た様になり

ればばつたいた御託をならべはじめた。ようやく

になつてから、自分の都合のよい、自分達に都合のよいアシタだけしか知らされてない大人の日本

人の常民が、韓国人産にたいし尊大自負する処が大で、民族的にも馬の骨城いにし

がちなのは、日韓両國の体质的文化的成

立の「史的」過程を余りにも知らないのに

産力の発展を目指す場合の一つの行き方を示

もので、更に調査研究を続ける必要がある。

島根県とは万葉村を対象に共同調査を行ひ

、この漁村の新漁法導入をめぐる、自然的社

形態は「漁の生産組合的共同經營」であり、小漁業者

、零細漁業者が、漁業經營の合理化、漁業

昭和三十一年の

加藤源清

以上お互いの実践を通じての語話をお互い共通の場においての討論により、より一層の底下げを行なつて、理論的に深めると同時に、調査が実効を收め得るものとなるよう努めて行きたい。対馬潮流調査もいよいよ、一応の収束に取扱らねばならぬ時刻である。過去半世紀近くも後進地域として取残された裏日本というハシマティキヤツツをとり戻すための以上の事柄を急務において、地域漁村の深い下げに併行して、管内全国の総合的な取組みにも考慮を配ることが肝要であろうと考える。昨年同様否、一層の御支援と御協力をお願いする次第である。

昭和二十七年の春から新潟県水試と協同で実施してきた佐渡羽越を中心とした底栖類の調査研究は、すでに昨年春までの予定された三ヶ年の間に所期の予定計画を終了した。その後現在に至るまで、これが整理取扱いを怠ったので、近く脱稿の上印刷に附する階になった。この調査報告には漁場生物学的な分野の研究とともに沿岸漁村の経済と漁業の実態などをも取りこなしている。また一昨昭和三十九年夏の当市における水研担当者会議の決定に基き整備中の日本海における重要な漁

魚資源の解説的なプロダレス・リポートもいづれ、今春三月末までには印刷にする予定になつてゐる。今年度調査をお願いした衣笠岡保府長は、秋田新潟、兵庫、鳥取の四県であるが、いづれも緊密な連絡のもとに調査も順調に進歩している。本所が姫路実施している熊登沖における春の大事業であつて、昨年春まで、計四大回に及び、この結果、同水域における大羽いわしの産卵行動の追跡も一応終了したので、本年春にはこれらの裏付調査とともに、さらにお前進して放卵後の授精卵の移行経過と当初から予定計画してきた漁場形成の問題を中心課題とする予定である。従来、大羽いわしの調査研究に重点をおきながらたったが、今年ははとくにシラスから小中羽まで含めた、マイワシの全生活環を究明する方針により強く指向するよう心懸けていた。またこれと同時にカタクチやウルメについてもこれまで以上に関心をねつて行きたい。また対馬暖流の開発調査の一環であるサバの生物学的問題、浦郷支所と協同でやつてるするための研究にもとくに最大の努力を払いたい。生態学一科としてはこのような多岐にわたった調査研究のための多忙な一年が開始されようとしているのであるが、さらに一つの重要な問題に昭和十九年度のいわし類のプロダレス・リポート取纏めがあるのである。これは東海区(昭和二十四年一二十六年)西遊区(二十七年)南遊区(二十八年)各水研の取纏業者の四等として当所が担当決定となつたものである。

統計課では資源解構的研究が続けてられるべくに今年度は昨年から検討されてきた山口県冲の仔いわしの調査と有限水域における実験計画が具体化することになり、専門家、同科は生態学者、水理学者、作成を怠らぬばならず、これに伴い、従来行われて来た理論的研究を凝集のデータ化へと進める研究を行わねばならず、これまた多忙な日々が繰り抜けられるであろう。

新潟支所の資源科では昨年度までのソウハチの研究が一段落したので、今年はニギズとツワモノの年を肯定を中心とした生態研究が行われる予定である。又蓄積管理科は一昨年六月七尾鴻におけるアコヤ資源の研究が完了し、この報告は別途刊刷に附された。香住監修後の同科では各府県の浅海增殖事業の指導に努力してきたが、今年度からは日本海の特殊事情を充分に勘察して本来の進むべき研究課題の発見に努めた。いよいよ、今度において果すべき當局内の全般を通じたのであるが、現在実施しつゝある水産資源の研究は果してこのまゝござよいかどうか課題について今年もさらに内省をしなければならないと考えている。(日水研資源部長)

研究